

「ちょっとだけやってみない？」が、ひらく世界

#フレンズ☆SAKAE／

#Sakae Wakamono Creation 2024



子ども・若者の居場所づくりが議論されるとき、必ず語られるロジャー・ハートの「参画のはしご」。そこには地域社会への参画の度合いを高めていくスモールステップが示されており、地域の大人たちはそれを見て若者のまちへの積極的な関わりをすぐに期待してしまうものです。

ただ、若者たちにとって生活の場である居場所は、家庭や学校を離れてそこに安心して居られるということ、そのものが最初のステップ。主体的な参画のステージに歩み出す、最初の一步を探してある居場所を訪ねました。



フレンズ☆SAKAEの施設。開放感のある表側でワークショップなどが行われ、実家のような裏側ではくつろぐ姿も。どちらもフル活用

フレンズ☆SAKAE

横浜市栄区本郷台に位置する青少年の地域活動拠点、フレンズ☆SAKAE。徒然草の作者、兼好法師が和歌を詠んだことでも知られるいたち川にほど近い、のどかな環境に利用者の声が続かない居場所があります。

横浜市の青少年の地域活動拠点は、平成19年の要綱制定以来、青少年の交流や社会参画の場として機能を拡大しており、現在全18区のうち7区に設置されています。そのうちフレンズ☆SAKAEは、子育て中の親子、青少年、障がい児・者といった幅広い対象を支援する4つの機能を有する複合施設、さかえ次世代交流ステーション内にあることが特徴です。

各施設を運営する社会福祉法人、「地域サポート虹」と「訪問の家」の2つの団体が、各機能の提供にとどまらず、年代や障害の有無にとらわれない利用者相互の交流や支援者との連携を図りながら運営をしています。

Sakae Wakamono Creation 2024

フレンズ☆SAKAEのもう一つ特徴的な取組みが、「ティーンズクリエイション」、いわば地域ぐるみの若者の芸術祭。近隣のアート活動団体や他の青少年支援団体等とともに2012年に活動を開始し、2018年からは「ティーンズクリエイション組織委員会」を構成して企画しているもので、10周年にあたる今年度は「Sakae Wakamono Creation 2024」として実施しました。

中身は近隣地域の中高生世代の作品展示部門「ティーンズクリエイション展2024」と、高校生～20代前半の若者を公募して行う創作舞台の2本立て。県立地球市民かながわプラザ（あーすぷらざ）を舞台に、12月に作品展示部門とプレ公演を含むライブ、1月に創作舞台部門の本公演を実施しました。

作品展示部門

ティーンズクリエイション展 2024

創作舞台とリンクしたテーマ、「内なる自分を探す旅 ―見えている自分と本当の自分―」をテーマに、中高生世代を中心とする若者の文化作品展示、ライブパフォーマンス（ダンスパフォーマンス、創作舞台部門プレ公演、トークセッション）を行いました。

姉妹都市の長野県栄村の小中学校や、プロアーティストの出演もあり、地域の様々な繋がりが感じられる会になりました。



プレ公演と同時に行われた展示部門の様子。例年区内の小中学生の作品を中心に、多くの参加がある

※ 作品展示総数 318点
来場者総数 延べ 574名

創作舞台部門

「DeLeTe#君と私が■された日」

栄区を中心に、中学生以上の若者を対象として参加者を募り、応募者14名（キャスト13名、制作サポーター1名）で7か月の期間をかけて稽古、制作を行いました。1月18日（土）に迎えた本番では、3回の公演に計371名もの観客が来場しました。

主催者より
「開催にあたっての取組、および成果」

創作舞台では芝居を軸に、身体表現、群読、合唱を取り入れ、様々な表現方法により舞台を創作した。その表現を形にするために、即興表現や身体表現、歌、発声などのワークショップを行い、芝居やステージ経験のない参加者でも不安なく活動できるようにした。演劇活動を通じて、表現する楽しさ、仲間と一緒に活動する喜び、繰り返し練習する厳しさを感じつつ、芝居だけでなく多様な表現方法で公演を体験することができ、参加者が貴重な経験と感動を得ることができたと感じている。

昨年の演劇活動から引き続き参加者同士の関係継続がなされていて、今回の活動に参加できなくても、公演当日の手伝いなど、たくさんの仲間を支えられて舞台が完成されたと感じている。

今後は、若者が企画提案し、それを大人と共に具現化できるような活動としていきたい。

（「まとめとアンケート報告」より抜粋）

創作舞台のチラシ。気鋭のプロデューサー、ヤマザキミナコ氏のセンスがほとばしる

SakaeWakamon Creation 2024

新たな表現に若者たちが挑む創作舞台

■ティーンズクリエイション組織委員会主催■

ヤマザキミナコ プロデュース

Emotional art live

DeLeTe

デリート

#君と私が■された日

2025.1/18(Sat)

12:00- / 15:00- / 17:30-

※各回開場30分前

席料: ¥1,500

※3歳以上要席

会場: 神奈川県立地球市民かながわプラザ

『あーすぷりざ プラザホール』

21

合わせ・チケット販売



ストーリー

主人公はどこにでもいる女子高生。自分に自信のない彼女は、いくつもの仮面（ベルソナ）を被ることで理想の自分を演じていた。しかし、理想と現実のギャップに苦しみ、たまった鬱憤はある日言葉の刃となり、味方であるはずの人々にまで向けられていく…



ティザー動画



参加者（キャスト）の声

今回は群像劇で、それぞれに見せ場がありました。身体表現ではコンテンポラリーに丁寧に取り組んだので、個々の表現で差を創ることもできたと思います。

私は4回目の参加です。演劇が好きで参加したところ、歌も群読も付いてきたという感じで、新しい体験があって楽しかったです。ストーリーを予想するのが楽しみで、キャストへのあて書きではないと思うんですが、書き上がった台本を読みながらメンバーたちと「この登場人物が似ているんじゃない?」、なんて話をするのも楽しかったです。

当日、インフルエンザで参加できなかった子が、始めたときは遠慮がちだったのに来年またやりたいと言っていたのが嬉しかったです。常に初めての人がいるのも、新しい人と関わるいい機会になっています。

私は個性をどう捉えるか、権利をどう尊重するか…について関心があるので、いつかそういうテーマにも取り組んでみたいですね。

観客の声 (関係者より)

劇評 創作舞台「DeLeTe #君と私が■された日」

美しい映像、印象的な語りから始まり、歌唱、身体表現、群読が丁寧に配置された展開。舞台装置や小道具、音楽の演出が行き届き、衣装やメイクもミニマルに世界観を伝える。主人公達の心の動きを追体験させる演技はそれぞれ「主演」に相応しいが、それとともに周囲を固める演者が世界に奥行きを創り出す。彼らの存在が舞台に新たな視点を与え、茫洋としたベルソナを立体的に形づくっていく。

独立したよくあるエピソードがやがてひとつの事件として顕在化するとき、それまでのテキストが象徴的な意味を帯び始める。心地よい対句的な文体、エモーショナルな表現にテンポよく魅せられる中、突如として揺り動かされる強いインパクトがそこにはある。言語化の難しいこの観劇体験は、観客の胸にプロデューサーの意図以上に深く刻まれたと言ってよい。

終盤にかけて抽象の度合いを高めていく構成ながら、いささかも目を離すことはできない。私たちがともすれば匿名化し、他人事として逃げてしまうテーマに、誠実に向き合い、闘う姿勢をみるからだ。自らのベルソナを考えさせられると同時に、逆説的に到達するのは、自分自身が人間という集合体、あるいは時代性のベルソナのひとつに過ぎないという感覚でもある。若者のナーバスさ、デリケートさを、これほどダイナミックに描く作品はそうはない。

SNS上の誹謗にあふれる時代を生きざるを得ないこの時代の若者が、DeLeTeを演じている。成長することの苦しみを、全身を通して瑞々しく伝えている。観客のどこかに、演者のどこかに、何か形で見えない価値が残るのだと思う。それは「あの時代」として、いつか私たちが呼び起こす記憶を紡ぐ。社会にとって小さな出来事でも、一人の人間にとってのかけがえのない一歩であること。それが人生にとって特別な瞬間であること。プロット上でみせた成長は、現実の彼らの人生の軌跡でもある。

劇中で敢えて明かされることのなかった「■」。君と私が祝福された日、と私は読みたい。

さかえ de つながる、参画のはしご

元 利用者が語る フレンズでの日々と未来

フレンズ☆SAKAEの元利用者で、現在東京都にある児童養護施設に勤務する坂本 祭（まつり）さん。高校時代のティーンズクリエイションとの出会いは、同時に彼にとってはたくさんの人との出会いそのもの。やがて主体的な参画のステージへ駆け上っていくことになる若者の成長の軌跡は、居場所づくりのヒントにあふれていました。

フレンズ☆SAKAE／ティーンズクリエイションとの出会い

→フレンズ☆SAKAEを知ったきっかけ、出会いはなんでしたか？

高校時代、おもちゃの病院というボランティア部に入って活動をしていました。そのおもちゃの病院は、地域の子どもたちのおもちゃを直す活動で、それがこういって世界に最初に足を踏み入れたところですね。

学校全体も結構地域のイベントに積極的に参加する学校だったので、そういったボランティアをする中で自分でも何か参加できる活動がないかなと考えていた時、栄区でパン屋を営む母がチラシを持ってきてくれました。

「ティーンズクリエイション Wakamono Arts Festival（わかものなんでもぶんかさい）」。なんかこれボランティア募集してるそうだからやってみたら、と言われて、飛び込んでみたのが最初のきっかけでした。

→最初は芸術祭との関わりだったんですね。出展者、出演者になったということでしょうか？

ちゃんと絵を描いたことはなかったので、何か出展するというよりはそれこそスポーツとしてボランティアをやりたいというような気持ちで。芸術作品の展示会場のボランティアでした。

最初は会議に参加させていだいたんですが、情けないことにめっちゃめっちゃつまらなかったんです。というのも、高校2年生の僕にできることなんて何にもなくて、自己紹介しただけで終わった記憶があります。

不安が残る中で当日を迎えて…いざ当日を迎えると、そのイベントがすごく楽しいものでした。作品を展示する作業も楽しかったですし、展示場でお客さんと話すのもすごく楽しかったです。会議ではあまり話す機会はありませんでしたが、当日になってスタッフのみんなとちゃんと話せるようになって、自分のことも知ってもらって、というのが心地よかったんですね。今年の展示は行けなかったですが、高校2年生からは毎年行ってたんじゃないかなと思います。

当時、その場に岩堀さんもいて、フレンズ☆SAKAEのことを知り、今度行ってみようかなと思って、行き始めて…という流れです。

ティーンズクリエイションの価値

→一地元でそういう場がある、ティーンズクリエイションがある、ということについて、今はどんな感想をお持ちですか？

例えば美術部や書道部の展示が学校内で完結していたり、それぞれ作品を中々見てもらいにくいというようなことはあると思います。展示部門に関しては、いろんな部活が一緒になって、物を展示し合うっていい環境がいいですね。

実は演劇部門の方では僕も出演したことがあります。それまでは演劇に触れる機会も全然なかったの、こういう世界があるんだというのを知ったし、さらに演劇を通して、フレンズで全然話したことがない子とも話せるようにもなりました。

後から振り返ってみると、今の僕があるのも、そういえばティーンズクリエイションがあったから、フレンズ☆SAKAEがあったからかな、みたいな感じはあります。今、僕は児童養護施設で働いていますが、子どもたちに何かできないかって最初に思った場所はフレンズですし、あと地域活動を結構がんばりたいと思っているんですけど、それも高校2年生のときの最初のティーンズクリエイションのワークショップが影響していますし。

その年たまたまですけど、「祭」について考えるワークショップがあったんですよ。栄区でお祭りをすごく盛り上げている方がいらして、その方から日本の祭とはなんぞやっていうのを教えていただくワークショップで、とってもおもしろくて。

その方が結構すごい方で、外国でお神輿をやっちゃうみたいな、自分のお神輿を持って行って日本の祭の文化を知ってもらいたい活動もしていたんです。それから、自分の映画を作って映画祭をやることにしたから手伝いに来てほしいとか。その関わりから、地域で活動することがどんどん楽しくなっていくと思いますね。

当時、一緒に神社を月に一度掃除するというのを始めたんですけど、もう5年ぐらい継続しているんです。最初の方は他に2人ぐらいいなかったメンバーが、今はもう40とか50人くらいになって、さらにそこから太鼓チームができたんですよ。僕も一緒に活動していて、最近笛を始めました。太鼓と笛を合わせて神輿を担いで、を目指しています。

他の方で、国際協力についてのワークショップに参加したこともあります。日本の若い子たち、23歳ぐらいまでの子たちを海外に行かせてあげようという活動をされている方でした。その方とも仲良くなって、僕もぜひ海外に行きたいですって言ったところ、本当に行かせていただいたこともあります。

ティーンズクリエイションにはいろいろな経験、体験をいただいたと思いますね。



フレンズ☆SAKAEでの日々

一ティーンズクリエイションのワークショップはフレンズ☆SAKAEで行われることが多いそうですが、そういった拠点、場があると、機会が雪だるま式に増えていくのかもしれないですね。言葉を変えると学校に通って、おうちに帰って…というだけの生活だと出会えない人に会える空間です。

仮に、坂本さんがティーンズクリエイションに出会わなかったとしたら、どんな大人になっていたと思いますか？

おそらく子ども関係の仕事には就いてないんじゃないかと思いますね。休日もゴロゴロして特に何もしていないと思います。元々高校でボランティア部に入ったのも、ティーンズクリエイションでボランティアをしてみたのも、なんか暇だったから、というのが正直なところで…。

福祉系の職業に興味はあったので、そういった仕事はしているかもしれないですけど、子どもと関わるというもう一つの軸ができたのはフレンズ☆SAKAEでの日常が大きいですね。

プレーパークで子どもたちと遊んですごく楽しかったこと、これは印象に残っています。それから、不登校を経験している子たちや、家庭が難しい状況の子たちとの会話とか。太鼓の活動が始まって、地域の子どもたちが来るようになって、休憩時間に「まつり～、遊ぼうよ！」って言われて遊んだり。

子どもに関わる職業に就きたいと感じ始めたときに、自分にできることはなんだろう、何をしてあげられるんだろうという、自分に対する問いかけが生まれ、フレンズ☆SAKAEでの日々の中、じっくり考えることもできました。

質問に戻ると、今まで自分が気づかなかった世界や、いろんな大人、違う世代の子の視点に触れて今の自分自身になっていったんだと思いますね。

一子どもや若者の居場所は社会的に注目されていますけど、フレンズ☆SAKAEは特に世代間の交流がすごく得意ですね。

居場所について考えたとき、ただ場所があるということではなく、安心できることも一つキーワードになってきます。場として、あるいは関わり方として安心できたところはどんなところだったと思いますか？

居ていいんだよという感じが何か心で伝わってきましたよね。言葉の全てから。次も行きたくなるような機会をいただけるのも行く理由になりますし。例えばティーンズクリエイションで言えば、ちょっとだけ演劇やってみない？と誘われ、やってみようかなと。その練習が例えば夜の6時からだとしたら、そうですね、少し早めに3時から行っておしゃべりしようかなと思える。

やっぱりスタッフの方々の「愛」ですね。

「なんていうんですかね…
いい意味で『関係ない人』
なんです」

話せる関係性の秘密

一人となりは大きいですね。フレンズ☆SAKAEの環境や、生まれる人間関係というのは、何か例えられるものはありますか？例えば、居場所については「家族みたいな関係」、なんていう言葉を聞くことがありますが、家族ともまた少し違う部分があるのかなと感じています。

実は、僕は隣の区に住んでいたので、40分くらいかけて電車でいつも行っていたんです。だから学校の友達とは全然違って、フレンズはフレンズの友達、みたいな感覚でした。学校の友達でもなく、近所の友達でもなく、ちょっと嫌な言い方ですけどいい意味で「関係ない人」、と言うと伝わるでしょうか。

関係ない人って嫌な言い方になっちゃうんですけど、だからこそ学校や部活のような自分の生活の話を説明したくなりますし、他の人の話も聞きたくなる。スタッフの方々とは、ティーンズクリエイションの話もたくさんしましたね。

こう表現するのがいいのかちょっとわからないんですけど、やっぱり生活の話を聞いてくれる、保護者でも先生でもない第三者の大人がいることによって増えた選択肢があったと思うので、そういう存在だったかな、と今は思いますね。

スタッフとしての目線

一お話伺っていると、本当に今につながっているんだなと実感します。

坂本さんは「若者」ならではの立場で、プレーパークなんかでは頼られる存在にもなっていて、ある意味スタッフとしての関わり方も経験されているように思います。子どもたちに関わるときに、ここはがんばったとか、工夫したなどということはありませんか？

同じ目線に立つことは結構意識していたんじゃないかなと思います。例えば、僕が当時大学生だったとき、僕の2個下ぐらいの高校生の女の子がいましたけど、その年代にとっても2歳は普通は大きな差ですね。でも話していて楽しい話題を選べば、もう普通に友達として話すような感じになっていきます。

当時中学生の、ちょっと不登校気味の女の子には、その子の話をなるべく聞いてあげたいなという気持ちで接していました。共感することもあるし、しなくてもただたくさん話せばいいと思っていましたね。



坂本 祭（まつり）
さん

フレンズ☆SAKAEに集った経験を持つ20代。好きなお祭りはお神輿で賑わう、栄区小菅ヶ谷の春日神社の例大祭です！

「同じ目線に立つこと。 そのことは意識していました」

相手が小学生になると結構変わってきて、もう全力で遊ぼう、と。遊んでいると、その小学生たちが「まつりくん、まつりくん」って来てくれるようになって嬉しかったですし、そういう子が友達を連れてきてその子とも遊ぶようになって、その輪がどんどん広がっていった…みたいな感じになっていた気がしますね。

フレンズ☆SAKAEでは、小学生の子なんかは時々宿題をやっています。見てあげることもあります。それが小学6年生の問題って結構難しいので僕がわからないときもある。それで小学生から勉強を覚えてもらうなんてこともありましたね。僕も本当に全然わからなかったの聞いていますけど、やっぱりそういうところが、小学生にとってはお兄ちゃんに教えてあげられたみたいな気持ちになっていたと思いますよね。

特別考えていたわけでもなく今振り返ってみるとですが、日常のところで、何か相手と同じ目線に立とうとはしていたんじゃないかなと思います。

「ちょっとだけ」、の持つ力

一もう一つ、企画について気になっています。まちにいろんな企画、いろんな機会があった方が、引っ掛かる子どもや若者が増えると思います。

どこかが全部やるとかではなく、いろんな団体さんがいろんなやり方でいろいろあるまちになったら素敵だなぁと思うんですが、その中で何かフレンズ☆SAKAEだからできた企画について、思い当たるものはありますか？

何だろう…居場所だからできること。でもやっぱり、僕にとっては演劇でしょうか。やりたくないではなくて、やったことがなかった。やったことがないからやろうと思う機会もなかった。改めて考えると、役者になるなんて自分自身でもちょっと驚いてしまいます。ただ居場所として来ていて、企画に誘われるということ、それ自体が体験ですね。

興味のなかった事柄、自分が今までやったことのなかった企画に、一步踏み出して、あれだけ取り組めたのは企画としてすごく熱かったなって思いますし、居場所の持つ力だったと思います。別に断る理由もなかったのに参加したという始まりでしたけど、あの体験を通して仲良くなれた子がすごく多いです。今では一番大切にしている体験ですね。

一やったことがないからやらない、になりやすいところ、やる方に向かうのがフレンズ☆SAKAEの素敵なおところなんです。

そうですね。「ちょっとだけやってみなよ」って岩堀さんよく言っていて。段々「3個だけやってみない？」、っていう風にならなくていいんですけど（笑）。

でもやって楽しかったことがたくさんありましたし、ちょっとだけやってみた、を自分の中でちょっとずつやってきた結果が今につながっていると思います。「ちょっとだけ」、やってみるのもいいかもしれないですね。

（聞き手 専門部会委員 岩堀 まゆみ
事務局職員 長南 悠太 ）



クロストーク

スタッフ目線 × 若者目線

最初に来たときは、誰とでも仲良くしましょう、したいですっていう雰囲気をあまり感じなかったの、こんなにフレンドリーに変わっていったのはちょっとわからなかったです。資質としてはきっと今のような部分があったんだと思うんですけどね。学校のように関係性が出てくると言えないことも、利害関係がないからこそ話せる、というようなパターンは、今いる子たちについても感じます。

ちょっとしたらもうどんどん変わっていった、と本人も話しているように、相手がいくつの子であろうが何でも同じところにいる、上からのものの見方をせずに非常にフラットな状態でいてくれる、そこにみんなが寄ってきていますよね。もう小学生全員から「まつりはいないのか〜！」みたいな感じの扱いなんですけど、だけど、どこかリスペクトしているところはあります。多分大人で、ちょっと年上なだけだからっていいみたいな存在なだけけれども、でも間違いなく大好き、みたいな感じですよ。そんな子がどんどん増えていったのが印象的でした。

本人にも話したことがないことで、私たちがフレンズ☆SAKAEとして、坂本くんと関わりについて考えていたことがあります。福祉への関心がある、ゆくゆくはそういった職業に就くかもしれないという話を聞いたときに、障害であったり、



居場所は生活の場。利用者の制作物や読み継がれたマンガが日常を感じさせる

スタッフ代表

フレンズ☆SAKAE代表 岩堀 まゆみさん

いろんな課題であったり、あるいは家庭環境であったり、そういうことに対して向き合う方向を間違わないで、表面上のことで決めつけないで、その人を見てきちんと自分の中で整理できる人間になってほしいなっていうのがあったんです。

福祉を担うにあたって、フラットに人を見ることは大切です。薬を飲む人は大変だからどうこうしてあげよう、とかそういうことではなく、その人の本質的なところを見て、支援を行っていく大人になってほしいなという思いがあったので、面倒くさいなと思われるかもしれないこともあえて伝えるべきことは伝えることもありました。

それからそれだけ人望も厚かったの、居場所ボランティアという形で大学3年生のときからは交通費を支給する形で来てもらっていました。ゆくゆくは多分、こういった系統の仕事に就くんだろうなということで、その間にいろいろ伝えられることは伝えていった、という関わり方です。ご本人にも全く言っていないんですけどね。

本当にどこに行ってもちゃんとやっていけるまで成長して、羽ばたいてくれたのかなっていう気はしています。もう私の方からは、どこに行っても元気で健やかに過ごしてくれればそれでいいっていう、もうそれに尽きますね。

若者代表

フレンズ☆SAKAE 元利用者 坂本 祭さん

それこそ僕、あんまり人と話したくないタイプの人間だったので、フラットに見る、ということはフレンズに行ってからちゃんとわかるようになりました。

フレンズでのきっかけから友達ができたというのはすごくあったし、学校とは違う友達だからこそ、属性ではなくて相手自身の性格、人格を感じて仲良くなっていったのかなと思います。僕に対して、人をフラットに見られる視点を身につけてもらいたっていうお話でしたが、心ではしっかり感じていました。フレンズに来る他の子たちも、同じだと思います。

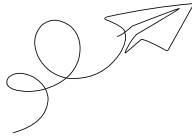
以前、岩堀さんは仕掛けづくりがすごい、という話をスタッフさんとしていて。中学校では不登校気味だった子が、メイクに興味があるということでメイク講座を開いたりして。その子はそのメイク技術を生かして、この前のティーンズクリエイションの舞台ではメイクさんとしても活躍しています。あともう1人、趣味とか特技とかあるのかなみたいな、あんまり表に出さないタイプの子がいたんです。フレンズでワークショップなんかに参加し始めてから、どうも演劇の才能がある、ということがわかり、もう毎年ティーンズクリエイションの演劇には出演しています。

こんな感じで、一人ひとりを見て、何か引っ掛からないかなっていうことを考えながらイベントを企画してくださっているというのは感じますよね。

僕は今、八王子に住んでいます。フレンズで感じた、地域ってすごい、地域活動ってすごく楽しいなっていう思いは引っ越してきてからも持ち続けていて、岩堀さんに倣って「仕掛けづくり」は大事にしようと思っています。なんか地域の人とつながらないかなと思って、掲示板をよく見るようになりましたよね。あと最近、河原を散歩していて、見知らぬおじいちゃんに挨拶したことがきっかけで、仲良くなって。そのおじいちゃんが蜚を守る会をやっている方で、活動に誘っていただきました。実は今日も、これから蜚を守りに行くんです。他にも、違う方に僕の名前の「祭」にちなんでお祭り参加しましょうって誘われたこともあります。

地域でつながるためにはどうすればいいか、潜在的にというか、むしろ顕在的にすごく意識しながら行動ができていないんじゃないかなって最近よく思います。僕の中では仕掛けづくりとか、種まきとか、そういうものは岩堀さんから教えていただいた言葉です。すごく今、実になっているので、なんかさすがだなって思いますね。

エディタース ノート 参画の補助線



フレンズ☆SAKAEの事例でご登場いただいた、坂本祭さんが参加する春日神社の例大祭

闇バイトや悪質ホスト、パパ活・ママ活、宗教2世、いわゆるトー横キッズ…と、2020年代に社会問題化した現象は、孤独を抱える若者の「居場所」として機能する側面があったことを見逃すことはできません。以前から問題になっているネット依存等も含め、かつての青少年の健全育成の取組みとは次元の異なる対応が必要な問題として認識する必要があります。

私たちにとって、居場所とは文字通り「いる」ということのみを指すわけではありません。玉川大学教職大学院の笠原陽子教授は、望ましい環境として、

- ① 所属していると認識でき、それ以外との境界が明確であること
- ② 見守られ、心身ともに安心感を持てること
- ③ 所属集団外とも自由な交流ができること
- ④ 一定期間継続性が保持されること
- ⑤ 発達に合った「枠組み」が提供されること

があると言います。人は居場所だと感じる場所では、安心して「心を置く」ことができるのです。

闇バイトに加担し、やめたくても脅迫されてやめられない状態、悪質ホストから他者との自由な交流が絶たれた状態、など、冒頭の問題に関しては上記の何かが欠けています。これは悪意を持った主宰者が、利益のためにその場所に依存させようとするからです。彼らは不安を煽りつつ、闇バイトに加担し続ければ組織に守られ安心だ…というようなロジックを騙ることで、若者をコントロールしようとします。

その結果、困難を抱える若者たちはより「マシ」な選択肢を自らを選んだように錯覚し、あるいは金銭／心理上の刹那的な報酬を得ることで、こういった場に一種の「居場所」を感じます。どの時代にも若者を操ろうとする悪意はありますが、現代社会におけるその狡猾さ、巧妙さには驚くべきものがあります。

こういった事件がなくなる背景に目を向ければ、家庭、学校、地域社会の変化、SNSの発達による情報の即時化、エコーチェンバー（タコ壺）現象等、多くの要因を語ることはできます。

しかし、分析や評価以上に重要なことは、私たちが若者の生活の中にあるべき居場所を作り維持すること、そういった様々な居場所について知識を持つことです。

一方で気をつけるべきことは、若者への押しつけにしないということです。社会経験を積んだ私たちは、つい若者に何かを授けたいと思ってしまいがちですが、若者はそれを望んでいるのでしょうか。フレンズ☆SAKAEの取材では、「いい意味で関係がない」という言葉が印象的でした。別の現場では更生を支援する施設のスタッフから、「この現場では社会参画のフェーズ以前の問題だ」という声もありました。現代社会には、家庭や学校での厳しい日常を闘い、安息を得るために別の居場所を探している若者がたくさんいます。今何よりも求められているのは、フラットな視点を持ち、この場所にいていいのだという安心を作ることができる、必要に応じ別の場所につなげる知識を持つ支援者の存在なのではないでしょうか。

神奈川県は医療福祉の施策として、未病対策を推進しています。私たちの心身の状態は、健康と病気の間で連続的に変化する「未病（ME-BYO）」の状態だと捉え、日常生活の「未病改善」により、健康な状態に近づくことを目指すものです。

すばらしい活躍をみせる様々な社会参画の事例も、全ては施設や事業への、ある日の一歩から始まります。またそれは、社会問題化する「居場所」に向かわせない、羅針盤にもなり得ます。

社会参画の前に、ちょっとした参加の機会を。その参加の前に、ただいだけでいい、安心できる居場所を。若者の「未病改善」の処方箋は、みなさん「関係のない大人」こそが握っているのではないのでしょうか。

（事務局職員 長南 悠太）

「マイプロ」からはじまる、まちへの参画

ふろぷろ Kananishi /

FROM PROJECT



家庭、学校に次ぐ第3の居場所、地域。

若者の居場所と呼ばれる施設はたくさん聞くけれど、県西地域をまるごとフィールドにしてしまう、画期的な「居場所」が(一社)FROM PROJECTが運営する「ふろぷろ」です。探究学習に通じる「マイプロジェクト」、通称マイプロを通し、中高生とともに独自の活動を展開する「ふろぷろ Kananishi」の活動を追いました。

(上) 探究学習的なプロジェクトだが、まちに関わっていくエネルギーの強さに特長がある。写真は、全国大会推薦者による発表

(下) 一般社団法人FROM PROJECT
2次元コード



100日間の流れ

FROM PROJECT

先行き不透明なこれからの時代、身を置く環境が変化してもそれに合わせて舵を取り物事を前進させ、世の中に自らが信じる価値を生み出すことが求められます。

そのためには、自らを活かす術を深く知り事実を正しく認識し、目的を持って意思決定を行い、他者と力を合わせ、心に描いたものを実現させる力が大切です。

(一社) FROM PROJECTは、その力をもつ人を増やすと同時に、社会に「グッドインパクト」を与えることを目指しています。

(ウェブサイトより抜粋)

全国各地で展開されてきた「ふろぷろ」は、身近な地域の課題解決を目指す、中高生向けの約100日間の無償プログラムです。2022年から小田原市で、2024年度には「Kananishi (：神奈西)」として、神奈川県から委託を受け広く県西地域の高校生を募集し実施しました。

ほぼ毎週末、3時間ほどのワークショップに中高生が集い、大学生等のスタッフメンバーから「知識や思考法」を、まちの大人から「地域の魅力や課題」を学びつつ、自分がやりたいと心から思える「マイプロ」をゼロから編み出して実行します。ワークショップのほか、2回の発表の場では「アウトプットの機会」と「人との出会い」を、上記以外の日には大学生のサポートのもと「プロジェクト実行」や「再挑戦」の機会を提供するというものです。

プロジェクト自体はあくまでも参加者の主体的な活動なので、自分のプロジェクトの社会的意義や自身にとっての目的に何度も立ち返り、悩みながら場面場面での意思決定を重ねることで「自己決定力」を養います。また、チームメンバーや大人の協力者を巻き込み活動を展開することで「他者と協働して目的を達成する力」が身につきます。

最終報告会後には振り返りや学びの一般化を重点的に行い、100日間の学びを一過性のもので終わらせず今後の人生に活かせるよう、消化し切るところまで徹底して行うことが特徴です。

教育的効果

ふろぶろのプログラムは、プロジェクトベースラーニング（PBL＝課題解決型学習）の考え方を元に、2014年、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの鈴木寛ゼミでスタートしたものが源流ですが、クリエイティブ・ラーニング（CL＝創造による学び）を取り入れるなど、その後絶えずブラッシュアップがなされてきました。

中高生のやりたいことと、身の回りの課題を掛け合わせて「マイプロジェクト」を作っていく上で重視することは、より大きな価値（＝GOOD IMPACT）を生み出すにはどうしたら良いか様々な角度から何度も問いかけ考えさせ、一人ひとりのストレッチゾーンに合った挑戦の機会を提供すること。

代表理事の竹内薫さんは、「ふろぶろは『個益』＝自分の幸せ、『公益』＝みんなの幸せと捉え、その2つが重なり合うところにGOOD IMPACT（価値）が生まれると考えます。個益のみの自己満足でも、公益のみの自己犠牲でもない、GOOD IMPACTが生まれるプロジェクト作りを、ふろぶろはサポートしています」と語ります。

最終報告会では取り組んだプロジェクトについてプレゼンし、100日間の学びを振り返ります。そしてこの経験をどう次につなげるか、まちと自分に向き合います。

「今取り組むマイプロジェクトの成否そのものよりも、想定通りにいかないことにぶつかり最初は考えもしなかった別のやり方で乗り越えられたという体験や、自分でゼロから何かを世の中に創ったという自信を生み出したい。」

ふろぶろ卒業後、進学や就職の進路に迷った時、何か新しいことを始めたい時、難しい問題に直面した時にこそ生きてくる力を、地域というフィールドで育てたい。

だから、「プロジェクトから」はじまる、『FROM PROJECT』、なんです。」

高校生の考える課題とは…？

こうして応募の中高生とともに走り出した2024年のプロジェクト。9月16日（月・祝）に南足柄市子育て支援拠点施設「にこっと」で実施された中間報告会では、次のようなプロジェクトが動き出していました。切実な想いから壮大な夢まで話題は様々ですが、SDGsへのまなざしを感じさせる発想はやはり多い印象です。

発表では必ず身近なまちや人々の様子が語られ、そんなところを見ているのか…と目から鱗の発想も。他のメンバーやスタッフ、地域の大人との対話の中で、まちのどこで、どのようなプロジェクトを進めていくか、具体的な範囲が絞られていきます。



（左）100日間の基本的な流れ。決まったオフイスはなく、オンラインも含め様々な会場で展開していく

（右）中間報告会時点のマイプロジェクト一覧（原文ママ）。「〇〇における□□」を解決したい、を基本に考える

- 1 小田原市における、規格外野菜の廃棄が発生していることを解決したい
- 2 開成町における、競技としての野球は知っているが、野球をやることにに関して浸透していないことを解決したい
- 3 小田原市でみんなが好きなことを話して共有できる場を作りたい！
- 4 松田町における、自分の通学路が狭いことを解決したい
- 5 小田原市における、あまり食べられない人による食品ロスを減らす
- 6 小田原市における、若者が悩みなどを話し合える環境がない、あったとしても知られないことを解決したい
- 7 小田原市における、地震に対する意識が低いことを解決したい
- 8 小田原市の結婚披露宴の食べ残しによるフードロスを解決したい
- 9 山北町・南足柄市における、防災の意識を高めたい
- 10 南足柄市における、傘をさしても靴や手荷物が雨に濡れることを解決したい
- 11 箱根町における、観光スポット「スカイウォーク」の渋滞が発生していることを解決したい
- 12 小田原における、使い終わった教科書の使い道がないことを解決したい
- 13 小田原市における、目的地に行けなくて困っている観光客を助けたい
- 14 小田原市における、通信制高校の良さを中学生、親世代などに知ってもらいたい
- 15 松田町における、文房具を簡単に入手できないことを解決したい
- 16 小田原市における、歩きスマホを解決したい
- 17 箱根町における地球温暖化解消のために、電気タクシーを走らせたい
- 18 小田原市における、なんでも話せる場所がないことを解決したい
- 19 グラウンドを人工芝に変更することで、県西地域における、サッカー部が弱いことを解決したい
- 20 アプリを使って小田原市における食品ロスを解決したい
- 21 小田原市における、エスカレーターが混雑していることを解決したい

100日間を、駆け抜けて 参加者が語る プロジェクトの体験と成長

アクション

様々な世代の人に通信制について知ってもらう取り組みを行いました

祖父母世代	メディア化 神奈川新聞さん、県立青少年センターさん、河合塾さん
保護者世代	親の会の運営者とお話
高校生・大学生 若者世代	オンラインイベント開催 （20代の若者8人が参加）
中学生以下	「お悩み相談会」の開催 「高校生と学びの選択肢を考える会」の企画

（上）発表資料の一部。一般の探究学習ではみられないような、多くの関係者、関係団体にコンタクトを取っていたことがわかる

今回ふろぶろKananishiに参加した飛鳥未来
きずな高等学校の3年生（取材時）、成川 愛花
さん。通信制高校のよさをアピールするマイ
プロジェクトを企画・実施した2か月後に、
現在の心境を伝えてくれました。

—最終報告会に向けて、生徒向けの相談イベント
を企画しました。どのような想いで企画されたの
でしょうか？

悩みを抱えている生徒たちを集め、悩みをシェア
できる居場所を作り、進路に悩んでいる子に学
びの選択肢の広さを伝える場を作りたいと思って
企画しました。

—タイトな期間での実施でしたが、イベント当日
はいかがでしたか？

私の担任と友達しか来なかったので、失敗だっ
たと思っています。中学生、高校生を集めるのが
難しかったです。いきなり対面での相談は緊張す
るだろうし、オンラインでも難しいと思います。

会ったことも話したこともないという状況だ
と、信頼を得られないですね。経験にはなりま
したが、思った成果が得られず、残念でした。そ
こから、どうしたら悩んでいる子に届くのか、情
報が届いてほしい人に届けるにはどうしたらよ
いか悩みました。

—10月26日の最終報告会ではその試行錯誤が支持
され、全国大会への切符を手に入れましたね。全
国大会に向けた取り組みを教えてください。

現役生だからこそ話せる高校の良さをいろんな
世代の人に伝えたいという想いから、「通信制高校
の良さとは？」をテーマに、大学生や社会人に伝
えるイベントを企画し、オンラインで開催しまし
た。地域でフリースクールを広めている人に呼び
かけてもいただきました。

また、小田原市内の中学校の進路説明会で説明
をしたいと思い、各中学校に掛け合いました。時
間がなかったこともあり、1校も実現できません
でしたが、好意的な反応の学校もあったので、2
月末に話せるかもしれません。

—イベントを企画してみて自分が変わったと思う
ことはありますか？

活動を通して、まだ今は後ろ向きな理由で通信
制を選ぶ人が多いという現実と向き合いました。
一方で、「この子たちには通信制を選択してほしい
」と思える人たちを見つけることもできまし
た。

変わったという点では、初めは、電話も怖かつ
たのですが、中学校に電話をかけ続けて怖くなくな
りました。実際にいろいろと行動に移せるようにな
ったのは、自分が強くなったからだと思いま
す。また、初対面の人に対しても、自分から過去

教えてもらったタスクは「一日一つ」どころではなく、毎日いくつも！

10/25(金)	☐	発表練習完成
10/20(日)	☐	スライド完成
10/14(月)	☐	イベント開催(お悩み相談会)
10/12(土)	☐	パネル開催
10/10(木)	☐	カウンセラーに良い話の聞き方を教わる
10/9(水)	☐	ふるふるアカウントのインスタで告知
10/4(金)	☐	UMECCと図書館にチラシを直接届けに行く
10/4(金)	☐	遠い中高にポストにチラシを投函する
10/4(金)	☐	近い中高にチラシを直接届けに行く
10/3(水)	☐	チラシ印刷
10/2(水)	☒	チラシ完成
10/2(水)	☐	自分の高校のインスタに告知してもらう
10/2(水)	☐	切手購入
10/2(水)	☐	封筒購入
10/2(水)	☒	小田原市内全中高にチラシ貼れるか電話
10/2(水)	☐	イベント開催場所のアポ取り
10/2(水)	☐	イベント開催場所のリスト化
10/2(水)	☒	チラシを送る先(中高)のリスト化
10/1(火)	☒	電話で聞く内容を考える
10/1(火)	☒	アンケートフォーム作り
10/1(火)	☒	どうお悩み相談会を進めていくか決める
9/30(月)	☒	中間報告会
9/16(月)	☐	イベント内容を決める
	☒	歩いてポスター渡せるところを決める

「いろんな人と関わってこそ、 まちに愛着が生まれると思います」

成川 愛花さん

ふるふるKananishi参加者。
高校の先輩に教えてもらったことを
きっかけに参加したところ、なんと
想像以上に大変で、しかも想像以上
に楽しかったのだとか。



の話ができるようになってきたことも大きな変化
だと思います。

—全国大会は一泊二日で行われたそうですね。全
国大会はどんな感じでしたか？

おもしろい場でした。夜中までスライド作成を
しました。全国大会ではレッドカーペットでの入
場から自分で考えるんです。とてもよい経験にな
りました。

—今後はどのように活動されますか？

まずは大学受験が目前に待っているので、そ
こをがんばりたいです。

不登校の子だけではなく、いろんな人に通信制
の良さを知ってほしいという気持ちは変わって
いません。不安を感じている在校生に、通信制の魅
力を最大限活用することで楽しい学校生活を送れ
ると知ってほしいし、不登校の子どもや保護者に
対しても、通信制という学びの選択肢の魅力を伝
えていきたいです。

不登校の子の親の会の方とできたつながりか
ら、受験後には支援機関の方たちと一緒に活動し
ていく予定です。一人だと難しいので、大人と関
わってやっていきたいと思っています。現役で通
信制に通っている生徒がいて、自身がゲストと
なるイベントもやってみたいです。

今、成果は出ていないけれど、続けることで
いつか想いは届くと思っています。これから先、活
動を続ける中で、自己実現のサポートをしていけ
るようになりたいです。

—改めて振り返っていかがでしたか？

このプロジェクトに参加した当初、課題解決し
たいことは何かと問われた時、通信制を広めたい
と思いました。

それが自分自身の過去を振り返る機会になり、
その中で、やりたいことがはっきりしていきまし
た。今回の活動は課外活動の場というより、教育
の場に参加したという気持ちが強いんです。

今後は、大学に行きつつ、生活費も稼がなけれ
ばいけないので、後輩のサポートまではできな
いかも…と思いますが、たまに参加できるものだ
たら、参加したいです。

ふるふるで生まれたいろんな人との関わりの方
で、私のプロジェクトも時間はかかるかもしれま
せんが、届けたい人に届けることができると思
います。

—ふるふるは、教育というよりまちづくりと代表
理事の竹内さんがおっしゃっていました。このプ
ロジェクトには、若いうちから地元を好きになっ
てほしいという気持ちがあるそうです。

小田原や県西地域への想いはいかがですか？

実は私、住んでいるのは熱海なんですけど、東京
から引っ越してきたこともあって地元という感覚
がありません。小田原、県西地域のみんな
のプロジェクトを近くで見ながら、地元愛が生
まれたというか、よい学校を選んだなと思います。
将来も、小田原に知り合いが多くいれば戻って
くるきっかけにもなると思っています。

ふるふるには地元企業の社長の方も来ていたの
で、地元の人も優しい人なんだ、いろんな魅力が
あったんだと認識する機会にもなりました。やっ
ぱり、いろんな人と関わってこそ、まちに愛着が
生まれると思います。

ふるふるの活動は、県西地域全体を居場所とし
ていると感じています。

中間発表で成川さんと初めて会った時、通信
制高校を広めたいという並々ならない情熱を感じ
ました。しかし、活動途中での相談会の失敗
や、通信制高校へのステレオタイプの目線に
触れ、悩んだ時期もあったそうです。

そうした経験からどうしたら人々に届くのか
を真剣に考え、行動に移した結果、成川さんの
言葉はより重みを持ち、一回りも二回りも強
くなったように感じました。人前に立つのは今
でも緊張すると笑顔で語る、成川さんの成長が
楽しみです。

(聞き手 専門部会委員 益田 麻衣子)



ふろぷろのこと、まちのこと

竹内 堇さんと考える 若者の未来

今回、昨年度までの「ふろぷろ小田原」から県西地区全域に拡大して実施した「ふろぷろKananishi」。若者の社会参画のヒントを探して、「ふろぷろ」のこれまでと仕組みについて、代表理事の竹内 堇さんにインタビューしました。



竹内 堇（すみれ）さん

（一社）FROM PROJECT代表理事。ガムの高校を卒業後、秋田県の国際教養大学に進学し在学中の2020年に一般社団法人FROM PROJECTを設立。主に、中高生の主体的なまちづくり参画を促すための100日間のオリジナルプログラム「ふろぷろ」の開発や提供を行っており、これまでに全国28地域から計3,000人以上が卒業した。

約3年半前に小田原市へ移住後、多くの魅力的な地域人との出会いをきっかけに、神奈川県では初めてのふろぷろである「ふろぷろ小田原」を2年連続で実施。

2024年度は神奈川県から受託した事業、「ふろぷろKananishi」（Kananishi＝神奈西）として神奈川県西地域2市8町の高校生らにプログラムを提供した。また、法人外でも、多面的にまちづくりや人材育成分野に関わり、自らの背景や行動をもとに「自分の人生を自分で創る」ことを全国の学生に伝えている。



ふろぷろKananishi の目的
地域への愛着を深めること
地域を狙う者の育成
私と地域を好きになること

（参考）ふろぷろが大切にしている7つの心、「The 7 Hearts」

FROM PROJECT 1: The 7 Hearts ふろぷろ7つの心



今この瞬間に100%

本気でやるのと、なんとなくやるのは雲泥の差で、同じ時間を過ごしても、向き合う姿勢次第で全く違うものになる。だから今に集中して「今」の価値を最大化しよう。



行動至上主義で行こう

行動の伴わないプロジェクトは存在せず、どんなに良いアイデアを思いついても頭の中にあるだけでは、誰にも何の価値も生み出していない。圧倒的行動量の人は圧倒的な経験と学びを得る。



すべてを糧にする

プロジェクトを進めていくと、「100%思い通りで大成功」とは大抵ならない。成功や失敗というラベルに惑わされず、丁寧に振り返り、自分の中で次に繋がるように意味付けをしよう。



半学半教の姿勢で向き合う

ふろぷろには先生がない。生徒もない。みんな自分の人生しか生きたことがないから、しかもみんな絶対に違う人生を生きているから、必ず全員に教えられることがあり、学べることもある。



未来は自分で創る

人は変化するし、社会も変化するし、ふろぷろも変化する。全てはその変容の途中で、完成も確定もない。ワークショップの内容が、誰かひとりの意見で変わることもあるし、それができそうな柔軟で強いチームで在ろう。



わくわくに任せる

VUCAの時代と言われる現代社会で、「正解」なんて大抵存在しないから、やってみなきゃわからない。何ができそうか、褒められるか、よりも、何がしたいか。自分の中のわくわくを大事に意思決定をしよう。



愛を持って人と協働する

愛を持って協働するとは、相手の意見を優先して自分の意見を抑えるのではなく、相手の意見も自分の意見も大切にしたい上で、愛のある伝え方で話し、愛を持って話を聴くということ。

10月26日(土)に小田原お堀端コンベンションホールで行われた最終報告会の日は、それぞれがそれぞれに緊張しながら全力を尽くしました。当日、印象に残った「マイプロジェクト」について、竹内さんは顔をほころばせながら次のように語ります。



「もちろん、それぞれ印象に残る点はあったんですけど、ふろぶろが大事にしているThe 7 Heartsの中の1つ『未来は自分で作る』をまさに体現していた『早雲様レモン洗浄計画』というプロジェクトが印象に残っています。

プログラム初期～中間発表会の頃は電気タクシーに北条早雲像をラッピングするプロジェクトを考えていたんですが、その後企画していたプロジェクトはすでに実施されていることが発覚したんですね。そのため、新たにこのプロジェクトを立ち上げるに至りました。だから、やや遅れてのスタートダッシュとなりました。

そんな中でも、彼は早雲像を磨くために、小田原市観光協会、市役所の各課、上下水道局など多岐に渡る関係各所に電話をしたり、作成した企画書を提出したりするなど、自主的に交渉を進めていました。並行して、飲食店で廃棄されるレモンの皮を集め続け、最終的に彼の手元には約300個のレモンの皮が集まったんだそうです(笑)

ただ、残念なことに、最終報告会までに早雲像を磨く許可を得ることはできませんでした。

次に早雲さんが描かれたマンホールの縁の洗浄を提案してみたのですが、こちらも許可が下りず…。それでも、彼は諦めませんでしたね。早雲像を洗浄するという夢のためにも、そして集めたレモン300個を無駄にしないためにも、まずはどこかやらせてほしいと。最後は、私が見つない小田原城の館長の元へ、自分で突撃して直談判していました(笑)。それで、なんとか小田原城の案内板を磨く許可をいただき、最終報告会当日の“朝”、リハーサル開始直前に磨き上げたんです。」

3か月の短期間に、企画書を4つ、チラシも3種類作るという紆余曲折を経た彼は、なんとこの100日間のことを計62枚ものスライドで発表したそうです。

「彼は本当に最後の最後まで『まだ希望はある』と言い続け、100日間を走り切りました。結果的に全然違うプロジェクトに変わったわけなんですけど、実は根底は同じで、SDGsへの強い興味関心、北条早雲に対する愛情が原動力になっているんです。あの時の彼の“熱量”と、心から楽しそうにプレゼンテーションをする姿はとても印象的でした。」

「FROM」 PROJECT

ふろぶろというプログラムは区切りこそついたものの、多くの場合、この期間の1度だけの企画・実行だけでは、大きな夢は実現しないもの。

「Good Impact Challenge」という全国大会に選出される参加者には、その後数か月間のサポートがつきますが、彼らの壮大な目標は道半ばです。竹内さんは、そんな状況を理解しつつ、あえてその先は彼らに任せるスタンスだと言います。



「ふろぶろは100日間で『企画の立ち上げ～検証、振り返り』を前提としたプログラムです。ですが、この100日間で全員に成功体験を積んでもらうことが目的ではないんです。この期間で成功も失敗もたくさん経験し、とにかく場数を踏むということを大事にしたいんです。人生で初めて企画書やチラシを作った、人生で初めて直接電話をした——そういう多くの初体験を伴走し、失敗を恐れすぎずに挑戦できるマインドを育てていく、そのための100日間なんですね。

プロジェクト後にさらに活躍する参加者には、文字通り「100日間を全力でやりきった」という共通点があるのだとか。本当に泣きながらがんばっていたような参加者は、80年の人生に影響するだけの100日間として消化することができ、さらにその先に伸びていくそうです。

大きな成果があった、地域や社会の課題を解決したとまでは言えないプロジェクトであっても、最終報告会で話せることの量と意思の強さは声や表情、姿勢から確実に伝わるもの。そういう参加者がさらに伸びていき、近い未来、社会に影響を与える1人になる実感があるといます。



挫折体験と「失敗力」

失敗を恐れず挑戦し、実体験を学びに昇華させる力——ふろふろがそう定義し、大切にしているという「失敗力」。失敗を単なる「失敗」と捉えない「挑戦の味をしめた状態」は、失敗や挫折から立ち上がる経験なくして得ることはできません。

「実はこのプログラム、必ずどこかで挫折を経験するものなんですよ、ちょっとかわいそうなんですけど(笑)。ふろふろを卒業する以上、「なんとなく」、「とりあえず適当に」ということはできません。結局は最後に気づく時が来ます。

例えば、参加者のやる気がなかなか着火しないとき、スタッフからフォローに入っても本人からの返答が滞ることもあります。差し伸べられた手や声かけなどのチャンス全てを掴まない選択をした場合に、最終報告会をななめの状態で迎えるケースが稀にあります。でもその子たちって、やっぱり最終報告会のステージで自分で気づくんですよね、みんなとの熱量の差や、自分が語れることの少なさに。

ふろふろの100日間は挑戦の繰り返しです。挑戦には結果が伴い、期待した結果を得られないこと（失敗）も何度も経験します。自分のプロジェクト実施上の失敗であったり、プレゼンテーションや人との関わりの中での失敗であったり…人生で初めての体験だらけの中で大量の挑戦経験と失敗経験を積み、そしてワークショップ内で毎週振り返りも行います。そして、失敗に対する心の耐性と、失敗から得られるものの大きさを体感していきます。そうすると、挑戦の味をしめて、さらに新たな挑戦をするようになり…これがまさに、失敗力のある人が育まれるということですね。

ふろふろの卒業生には、大学生になった際に当時やってもらったように参加者の伴走がしたいとスタッフ側に回るケースもあります。スタッフになる彼らは、自分自身がものすごく変わったという実感を持ち、その変化が生まれる瞬間を作りたい、見たい、そういう想いで取り組んでいるのだそうです。

「大学生スタッフのすばらしさというのは、参加者に対してがんばっている姿勢を見せたり、間違えたりできることですかね、わかりやすく。

例えば学校の先生がミスをする姿をたくさん見せることって、難しいと思うんですよね。あ、間違えた、あれ忘れた、これやってない、みたいな訳には中々いかない。でも大学生スタッフは分かりやすく「学生」という学ぶ立場でもあるからこそ、見せられる背中があると思うんです。

間違えた時にどう修正しよう、ミスをした時にどうやって謝罪しようとか、そういう姿をより近くで生で見せてくれるのが、彼らなんですよ。たくさんミスができちゃう、挑戦や失敗と一緒に重ねて共に変化していく姿を間近で見せられる、そんな大学生スタッフは、ふろふろを形作る上で欠かせない存在だと思います。

教育へのまなざし



ふろふろの活動は、学校教育界でも一つのムーブメントになっている探究型の学習、まさにそのものと言えます。先進的な教育学的理論に基づくプログラムを開発しつつも、あえて学校という枠外で展開する竹内さんは、民間だからこそできることがあると意気込んでいます。

「実は学校と共同でやっていた時期もあります。高校の先生に実際にワークショップを見てもらい、何度かコラボ等のオファーをいただいて関わっていた事例があるんですよね。

ですが、どうしても学校という枠組みには制限があるものです。本当にやりたいことがそのままできるというのが一番なんですけど、それが学校というフィールドになった途端、一筋縄では行かないことが多いです。

やりたいことを実現しやすいのは、やはり何にも縛られず自分でやることなので、そういう意味では完全に民間という立場になってやっていく方が、私たちの専門性をより活かすことができますし、ふろふろが目指すことをより忠実に実現できます。

ふろぷろには大学入試の総合型選抜や学校推薦型選抜(注：旧AO選抜)のためにという参加者も一定数来ていますが、ただ入口は何でもいいと思っています。もちろんピュアな課題意識から参加してくれるのは嬉しいですが、正直なところ、結局プログラムを進めていく中で、入試のために計算してやってるんだ、とかはもう言っていられない状況になるんです(笑)。

目の前の人にどう対応しようとか、今やっちゃったミスどうしようとか、企画してはみたものの参加者が集まらなくて、どうやって実行しよう、とか。そういう瞬間がたくさん出てくるのが実際にプロジェクトをやるということなので、入口は何でもいいかなって思っています。

各々がいろいろな理由で入ってきて、そこに例え入試のためという層が一定数いたとしても、出口の時には忘れかけている。そのくらい夢中になれてこそ、入試を含め人生にとって大きな糧となる時間になると思うんです。」



(左、中) 北条早雲、小田原城と、その地域ならではの環境が探究のフィールドになる。図らずも、文化を次代に繋ぐ働きも
(右) 銅像を磨くために集めたレモンの皮

ふろぷろの考える場づくり、関係づくり

多くの現場の課題である、スタッフの声の掛け方やスタンス。参加者の中高生と大学生年代のスタッフがお互いに学び合う営みを大事にしているふろぷろの現場に、何かヒントが隠されているかもしれません。そこには、ハード・ソフト両面から、場を作るアイディアがありました。

「ハード面では、照明を結構重視しています。何かを考える時間は真っ暗にして電気の蠟燭を使ってみたり、とか。ふろぷろは常に決まった会場で行っているわけではないですが、こういうことはどの会場でも取り組みやすいですね。ふろぷろらしさみたいなものは実は一定あるので、そういう工夫はあると思います。他にも、椅子や机はできるなら撤廃したいので、できることならお座敷でやろうというのを前提にしています。お座敷で靴を脱いで人が動きやすくなると、障害物も少なくなつて人が流動的になりますから。あと、備品に大きなレジャーシートが2つあるんですよ。持ち運び用の取っ手もあり、20人くらいが座れるので、お座敷の会場が借りられない時にはそれを敷いて実施することもあります。

ソフト面で言うと、100日間の序盤はスタッフ側が意見を言い過ぎないことを大切にしています。参加者にはまだふろぷろでの文化やマインドが醸成されてないので、その段階でいろんなことを言うと、『周りの人の言うことは最大限聞かなきゃ』と思っているためか、色々振り回されてしまって自分の考えが分からなくなってしまう。

全部を全部聞き入れる必要はないと思うんです。10人に意見聞いたらみんな全然違うことを言うのなんて当たり前なんですし。でも、それを知らない参加者は「なるべく聞かなきゃ!」、「その通りに変えなくちゃ!」という姿勢がすごく強いので、最初の段階ではスタッフの意見を前面に出すコミュニケーションは控えるように言っています。

ただ最終的には、参加者もスタッフも言いたいことを言い合える状態が理想的だと思います。言わないようにする、言い過ぎないのがよい、というような関わり方については、本来何かを言うことが問題ではなくて、受け取る側がどう受け取るかという問題だと思います。

参加者それぞれが『人の意見には感謝して耳を傾けるけれど、全てを取り込むのではなく、何をどう取り込むかは自分で取捨選択する』という、私たちがふろぷろマインドと呼ぶ姿勢が育まれるような環境づくりこそやるべきことかなと思いますね。」

(聞き手 専門部会委員 益田 麻衣子
事務局職員 長南 悠太)

レビュー_2024

行政と手を携えて

「県西センターさんと
生み出したい価値が重なっているので、
事業全体を通して納得感があります」
(竹内さん)

民間の立場から行政と協働するふろぶろの事業。国内の様々な地域での事例を知る竹内さんに、行政との関わりについて感想を伺いました。



県西地域県政総合センターの最終報告会告知チラシ
作成：(一社) FROM PROJECT

—今回、県西地域県政総合センターの委託事業となったわけですが、行政と関わる地域の側の方々
は一種の難しさを感じる場面もあると聞くことがあります。というのは、一般的に地域が活性化し
ました、高校生がいきいきやっています、みたいな行政から期待されるゴールがありますよね。
そういった行政の思いと、若者たちが本当にそう思っているのか、というところでギャップがある
という悩みを寄せられることが多いんです。お互いに本当は違うところを見ているのに、一つのプ
ロジェクトでやるっていうのは結構大変なのかなっていうふうに想像して。

異なる主体がコラボレーションをしている以上、もちろん難しさはありますが、県西地域県政総
合センターさんと私たちは、見ている方向が近いと思っています。ですので、見ているところが違
うという点についての大変さはあまり感じませんでしたね。

お互いにこだわりなどはありますが、大枠として目指しているもの、生み出したい価値みたいな
ものは、言葉は違えど同じなんですよ。

実は、私が4年前に引き継いで今の会社を立ち上げたタイミングから、元々もっと教育色の強か
ったプログラムの土台に、まちづくりの要素を強化しているんです。まちづくりにとっても地域の
若者の参画は重要事項で、学生たちにとっても身近にある実践的な学びのフィールドとして、地域
と教育とは、すごく相乗効果の高い組み合わせだと考えています。

自己肯定感の醸成に関する文脈や、ふろぶろの重視する自己と他者への両方の視点などを汲ん
で、キャッチコピーに「地域と私を好きになる100日間」をご提案いただいたんです。一緒に事を
進めるにあたって柔軟に、根気強く対応していただき、色々な相談にも乗ってくださったおかげ
で、結果的に今出来上がっている。変に無理しているとか、実際やっているものと違うとかという
感覚はなく、事業全体を通しての納得感がとてもあります！

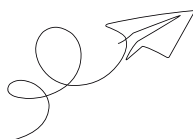
—それが行政との相乗効果になっている、というのはすごくいいですね。そこがうまくいかない
例もあると聞きますが、ヒントはどこにあるとお感じですか？

県西地域という、全県でもないし市町でもない、というところがすり合わせやすかった印象があ
ります。教育、商店街、のように行政的にはそれぞれご担当がいらっしゃると思いますが、縦割り
を乗り越えて柔軟に対応していただけたと感じています。

それと、やはり人ですかね。行政側にキーパーソンが現れるか、ということも非常に大きいと
思います。行政と言っても多様な職員の方々がいらっしゃる中で、今回、県西地域ぐるみで活動が
できればまちがよりよくなるから、と熱心に動いてくださった職員の方がいらっしゃって、この企
画が実現できました。

(聞き手 事務局職員 長南 悠太)

エディターズ ノート 探究学習のレイヤー



ふろぶろKananishiの活動中の、成川愛花さんの一コマ。大人の本気の姿勢が学びを深める

近年、まちを舞台にした探究的な活動は、NPO等が行政から委託されるという形で様々な地域で展開されており、子ども・若者の声を施策に反映することを謳う「子ども目線会議」の推進とも軌を一にする形で注目が高まっています。

ここで改めて私たちが探究的な活動について考えるとき、やはり押さえておきたいのは学校で行われる「総合的な探究の時間」についてです。

これまでの総合的な学習の時間が深化する形で2022年より高校でも本格的にスタートしたこの科目は、「変化の激しい社会に対応して、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成すること」を目標にしています。

その進め方は、探究の過程で必要な知識及び技能を身につけ、実社会や実生活と自己との関わりから自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析し、まとめ・表現するというものです。このことを通じて、学びに向かう力、人間性といった資質の獲得も目指します。

これをFROM PROJECTの展開する「ふろぶろ」と比較したとき、「総合的な探究の時間」が目指すもののそのものであることに気づきます。

一方で「ふろぶろ」の活動には、多くの学校とは異なるいくつかの要素があることもまた、浮かび上がってくるのではないのでしょうか。

1つは参加者の主体性の問題です。文部科学省の「今、求められる力を高める 総合的な探究の時間の展開」（令和5年3月）には、教育課程については、「生徒や学校、地域の実態を踏まえて（中略）指導計画を作成し、計画的・組織的な指導に努めるとともに、目標及び内容、具体的な学習活動や指導方法、学校全体の指導体制、評価の在り方、学年間・学校段階間の連携等について、学校として自己点検・自己評価を行うことが大切である」とされています。

授業時数の中で、学校に通う多くの若者が教科横断的にまちや社会を考える機会が生まれたことは画期的ではありますが、カリキュラムを学校が定める以上、一定程度は大人が若者に授けるものとなり、実際の活動はいわゆる「操り参画」に止まるケースも散見されます。また、進路選択に関わる「評価」を受ける点で、若者のマインドセットも受動的なものになりかねません。

もう1つは伴走する支援者の存在です。活動を大枠でコーディネートする存在はNPO等にもいますし、学校では教員が担います。違う点は、多くのNPO等で参加者のメンターとして少し年上の若者のスタッフ、あるいは地域の人材がつく事例が多いことです。取材を進める中で、この存在が活動のキーパーソンになることがわかってきました。

例えばふろぶろの場合、探究学習のゴール、「まとめる」というアウトプット部分だけではなく、地域で試行錯誤するプロセスの中で常に若者の学びが最大化する仕組みがあります。多くの地域で参考になりたい事例です。

一見似たものにも見える探究活動にも、実際には進める側の得意・不得意や目的の違いがあります。これらのことを、学校外の立場にいる関係者が理解しておくこと、自身の活動の強みを考えることが重要なのではないのでしょうか。

どの学校が、どの団体が、誰が優れている、という視点から離れ、若者がまちに関わり得る様々な機会を用意できることが地域の強さであり、資源です。探究のネットワークが増え、レイヤーが何層にも重なり合うとき、若者はどこかでまちと出会い、まちに向き合い、結果として地域は必ず活性化します。

どの活動に参加する若者も、たった1回の青春の時間を使って探究活動に取り組んでいます。その活動の支援に今まさに取り組んでいる、取り組もうとしている、そんなみなさんの活動に期待を寄せずにはられません。

（事務局職員 長南 悠太）